

【書評】

『談話資料 日常生活のことば』
(現代日本語研究会編、ひつじ書房、2016年)

因京子

現代日本語研究会によって『談話資料 日常生活のことば』がひつじ書房から刊行された。1997年以来同研究会が進めてきた「自然談話資料収集とその分析例の提示」という意欲的な活動の成果を公表する著作の四番目にあたる。第一作は、日本語研究に少しでも関心のある者なら誰でも知っている『女性のことば・職場編』で、これが斯界に与えた衝撃の大きさは今後もずっと記憶され続けることだろう。それまで言語教育の場で当たり前のように教えられてきた「日本語の話し言葉に現れる男女差」、特に、女性的語尾などの「女ことば」の使用が、少なくとも資料が収集された職場においてはこれほど少ないという実態を示され、まさかと思った人も、そうではないだろうかと感じていた人も、関心の薄かった人も、一様に、「実際の言語使用を収集し、虚心坦懐に眺めてみること」の重要性を改めて思い知らされたのである。筆者は、『談話資料 日常生活のことば』の紹介をするという荣誉あるお役目を頂いたのであるが、一層パワーを増した本書の目的や特徴については、高橋美奈子氏（琉球大学）の手になる簡にして要を得た見事な記述が巻頭に収められている。そこで、屋上屋を架す愚を避け、頂いた紙幅をありがたく利用して、言語研究と言語教育に携わってきた一人として率直な感想を述べ、現代日本語研究会の貢献への感謝のしるしとしたい。

屋上屋を架さぬと言った舌の根も乾かぬうちにこれを架すことになるが、やはりどうしても触れたいのは、本書の提供する資料が自然で真正であることの功績である。昨今は、「個人情報保護」「倫理的配慮」という切り札が出れば大した問題はなさそうに思われる資料収集すら難癖をつけられるようになっており、本当の意味で自然と言える談話資料は極めて手に入りにくい。そのせいなのか、あるいは一定の結論を導きたいという下心のなせる業か、それはわからないが、「自然な談話」とされている看板に偽りありではないかと思われる資料や、自然な談話のあり様を十分に反映しているとは考えられない資料を用いてこれを論じている研究もちらほら見かける。たとえば、協力者たちに集まってもらって、自然発生的動機が希薄であっても、無理に（まあ、お願いして）協力者同士で話してもらい、「自然談話」の資料と銘打っていることがある。筆者は「しゃべりながら生まれてきた」と実の兄にからかわれるほどのおしゃべりであるが、初対面の相手と適当に話せと言われても、相手とどのような関係や状況を築くのか、その方向性がまったくない状況においては、何をどう話せばいいのか、さすがに途方に暮れてしまうだろう。協力を求められた人々は研究者にどのような義理があったのか知らないが、御苦労なことである。さらには、「姉妹として話してくれ」など事実とは違うロールプレイの実行を求め、その結果をもとに、「遠慮のない間柄でも〇〇の例は生起しなかった。よって、これは、フィクションには出現するが自然な発話には生起しないと考えられる」などと述べられていることすらあり、口をあんぐりと開くしかない。…なげなしの仏心を総動員して言うならば、ことほど左様に、適切な「自然談話」の資料を収集するには手間も暇も知恵も根気も必要で、おいそれとはやれないのだ。翻って、本書が気前よく提供している資料では、最大級の真正さが追求されている。しかも、同一の話者が示す変移も捉えられている。資料化されているのは、協力者たちが普段の自分の生活の中で交わした話を本人の発意で録音したもので、収集されたすべてがそのまま資料とされているわけではないが、一定の基準に従って複数の研究者が検討し、恣意性を可能な限り排して資料化されてい

る。もちろん、文字化の手続きにも厳密な注意が払われている。自然談話を対象とする研究であれば当然とも言える配慮であるが、その配慮を貫徹することの困難を思うと、収集と資料化に携わった方々の真摯な努力に敬服するばかりである。

本書に収められた様々な分析は、談話研究の確かな発展を跡付ける力作ぞろいで、談話研究に志して間もない人々にとってはまたとない手引き、インスピレーションの源となり、研究を長く行ってきた人々にとっては、新たな研究意欲を掻き立てられるものとなるだろう。発話の実現形を「話者の個人特性」「相手との関係性」「発話の目的・意図」などいくつかの初期条件の関数として捉えるだけでは、個々の発話がそれぞれの局所的役割を果たしながらつながって、人間関係や状況を構築し、さらにそれを変容させ発展させていく、談話としてのダイナミズムは捉えきれない。本書に収められた各論文は、談話研究のこれまでの蓄積を咀嚼しながらも、固定観念に掬め取られることなく事例と向き合っ、多くの括目すべき指摘を行っている。

筆者が特に嬉しく思ったのは、日常談話の中に見られる「技巧性」「遊戯性」「批評性」が複数の研究によって認識されていることである。いくつかを指摘するに留めるが、たとえば、6章佐々木論文では、発話者のデフォルトと思われる文体とは異なる、いわゆる「役割語」的な文体が、「翻訳」とみなせる発話、すなわち、発話者自身の素面の発話ではないと明らかにわかる発話の中で使用され、会話参加者がその虚構性を了解した上で楽しんでいることが指摘されている。フィクションにおける「役割語」という虚構的文体の存在は夙に指摘されているが、これが日常の談話の中で出現する文脈とその効果が論じられたことは、注目に値する。第11章高橋論文では、「やめろよ」など、従来はスポーツ観戦時や緊急時などを除けば男性専用とされてきた「命令形」が女性によって用いられ、発話者と相手との力関係を微調整する機能を果たしている可能性が指摘されている。12章の高宮論文では、普通体が基調である談話において使用された丁寧体が、ある特定の事実や状況への傾注を誘発し発信者と受信者の「笑い」に収斂していく様相が観察されている。このような逸脱した文体が日常的に行われるやり取りの中で頻繁に使用されるわけではないだろうが、使用が確かに出現するという事実が観察され、そこに一定の効果が意図されていることが分析された。このことは、デフォルトや規範から逸脱した文体の使用の機能に以前から着目し、非母語話者対象の日本語教育の場で提示する意義を指摘してきた筆者にとっては、大変嬉しい。

筆者が改めて襟を正す気持ちになったのは、高齢者の外来語使用を扱った第4章遠藤論文である。「語の使用の多寡には、話題の影響が大きい」という発見を著者は「遅すぎた成長」としているが、極めて重要な指摘である。談話資料を扱う研究者はこれを常に心に留め、性急な一般化を戒めなければならない。著者が26年前に観察した結果と今回の調査ではかなり異なる様相を呈しており、話題の影響の大きさとともに、時代による変化も想像以上に大きいことが示唆される。実は筆者は、看護の現職者と接する機会が多く、今手元に看護師と看護師ではない人物（ともに60代前半）による25分ほどの談話の文字資料がある。これを見ると、「ホームラン、アインシュタイン」など今回の調査に現れているのと同種の語のほかに、「ジャンル、カテゴリー、グループ、システム、レベル、パターン、テーマ、トピック、タイトル、ニーズ、コンプレックス、ポイント」という抽象的な概念や事物を示す名詞群、「マンツーマン、キャッチー、〇〇ファースト」など様態を示す語、「アピール、チェック、アナウンス、パフォーマンス」など動詞的概念を示す語など、多くの外来語が用いられている。この二人の話者が70代となる5, 6年後には、出現する外来語の質量がさらに大きく変化しているだろう。先人による努力を今後についでいかなければなるまい。

すべての研究に触れることができず残念であるが、本書に収められた他の論文にも一読目を開

かれる分析が多く含まれており、談話研究に取り掛かったばかりの学徒はもとより、経験を積んだ研究者諸氏も、改めて言語研究の深さと面白さの広がり思いを致し、本書の資料を用いて新たな疑問の解明に挑戦しようと、高まる気持ちを感じるだろう。

(ちなみ きょうこ・日本赤十字九州国際看護大学教授)